

準備委員会企画シンポジウム 20

日本語で「こころ」を読み解く

企画・司会	南 博文 (九州大学教育学部)
話題提供者	北山 修 (九州大学教育学部)
コメンター	やまだようこ (愛知淑徳大学文学部)
	無藤 隆 (お茶の水女子大学生生活科学部)

企画主旨

現在の心理学、あるいはその隣接領域である精神医学などにおいて使われる大部分の術語は、外来の言語あるいはその翻訳語であり、私達日本人の生活からは遊離した抽象語であることが多い。このことは、現代の日本文化の構造そのものにかかわる問題であるが、とりわけこれらの言語を日常的に使わない一般の人々を相手とする臨床心理学や教育の分野で、コミュニケーションを妨げる要因ともなる。また、日本の心理学研究者の中から創造的な仕事生まれにくい背景に、日常生活経験を学問的なモデルに移しにくい学術言語の構造があるように思われる。

本シンポジウムでは、フォークシンガーソングライターとして出発しながら、その後精神分析学に転じ、臨床における言葉の役割、特にその橋渡し機能に関心をもって「日本語臨床」という独自の分野を開拓している北山修さんに、「日常臨床で心を描写するための言葉の発見と使用」について話題提供をしていただく。コメンターとしては、「ことばの前のことば」などの著作のあるやまだようこさん、「ことばの誕生するとき」の著作のある無藤隆さんに、コミュニケーション論や発達心理学・教育心理学への議論の広がり提議していただき、全体のディスカッションを深めたい。

日本語で「こころ」を読み解く

話題提供 北山 修

コピーバンドからオリジナルへ

あの頃(今でもそうだと思うのですが)、レコード会社の製作部門というのは、洋楽と邦楽とははっきりと分かれていました。皆さんが、レコードやCDを売っている店に行くと、このことがはっきりしますね。軽音楽のファンならなら誰でも知っていることですが、こういう音楽を演奏するバンドに、コピーバンドという一群がいて、実はわれわれのやっていたバンドも最初はコピーバン

ドでした。コピーバンドとは、外国の演奏をそのままそっくり演奏しようとするグループのことで、着ている服から、歌うときのハーモニーまでそっくり真似て演奏しました。メンバーたちは、オリジナルのグループが使用すると同じ楽器を手に入れようと一生懸命でした。われわれのやっていた音楽のジャンルはフォークソングと呼ばれるものですが、それらの歌が、伝えようとしているのが、好きな歌を好きなように歌っていいんだよ、自分で自分の歌いたい歌を作っていいんだよというメッセージを送っていたのです。だから、これらのコピーバンドたちが、自分で自分のオリジナル曲を作って歌い始めるのは時間の問題でした。

エディプスコンプレックスと詩

南博文さんと、やまだようこさんとが「発達」という雑誌で、公開書簡の形で連載を続けておられるのを拝見したことがあります。そこで、お二人が詩的(私的?)なものの方が「世界観のモデル」を構築するというところに何度も触れておられます。私は作詞家で詩人ではありませんので、言葉だけで勝負することはないのですが一つまりあくまでも歌の一部としての歌詞を書いているので、それが全部になる詩とは違うのです。ただ「ポエティック・リアリズム」というものについては賛成なのです。この羨ましいお二人のやり取りを見せていただけてすぐに思い出すのが、私がフロイトの精神分析を自分の仕事に選んだ理由のことです。これもまた幾つもありますが、われわれが作って演奏した「帰ってきたヨッパライ」(フォークパロディギヤング作詞)にエディプスコンプレックスが描かれていることが、精神分析のことを少しは信用してもいいなと思うきっかけにもなりましたし、いまでもほほえましくほくそ笑む所なのです。そして、こういう趣味的なものを素材にしますと、それを共有しない人、楽しめないひとをカヤの外におくことになることが、また興味深いことなのです。

二者言語と三者言語

またそれは、「無藤ニュース」（これは南さんによれば、パソコンネットワーク上で流している個人ニュースだそうです）においても、詩や歌謡曲が話題になって、新鮮で実に人間的な話題が提供されます。きっと私も、今日そういうことが期待されて居るのでしょう。こういうところでは、お二人だけでしか通じない言葉、あるいは独り言のような話が続きます。確かに、今、かつては市民権を持たないようなやり方で、世界の標準語としての 에스ペラント語の幻想を打ち砕きつつあるのです。誰にでも通用する言葉、第三者（他者）にすぐに分かるよう話される公用語、というものが、実は現実的ではなく、むしろ「あなたに通じればいい」と思って紡ぎ出される言葉のほうが、信用できるのかもしれませんが。ただそう思うのは、私が臨床家で、第三者に分かってもらう必要はない、まずは患者（クライアント）に通じればいいと思うのは、職業的なことでしょう。これは、参加する皆さんに聞いてみたいところです。

言語化

精神分析的な治療では、検討される素材はことばを通して報告されることが多く、無意識内容の一部を意識化すべくこれを「意味」としてことばで取り上げることばを治療の方法とし、主要な目的とすることが特徴のひとつです。そのための代表的技法を「解釈」と呼び、その典型を夢分析によって示すなら、夢を見た人がことばで語る夢の顕在内容と、それについての連想とを手掛かりにして、解釈のことばを通して潜在内容を明らかにすることになります。その治療効果に関する第一の説明、または理論的根拠としては、身体化、行動化を通して症状になっていた無意識の意味をことばへと変換することで意味回路を変更すること、あるいは抑圧の「蓋をとる」という発想があります。ゆえに、精神分析家は、もうひとつのことば、無意識のことばを話すことになるというのです。さらに精神分析家は、わけの分からない痛みや葛藤、荒唐無稽な思考や空想、曖昧な情緒や不安、さらに危険視される欲望と衝動に名前をつけて、有機的連環の中で整理するのです。ここでの、ことばの役割は、医学史初期の解剖学者の仕事に似ていますが、その目標は何であれ、心という目に見えないものの中でも、とくに見えにくいものに名前を付けて「操作」の対象にしたというのは画期的なことでした。

言葉と洞察 紙面の都合上割愛（企画者注）

日常語と開業

いまから100年前、精神分析学の創始者ジークムント・フロイトが精神科治療のためのオフィスをウイーンの町の中に開設して、ノイローゼを治療対象にしたとき、心の「はらいた・かぜひき」を町の中心で治療し始めたわけで、そのとき非日常的な精神医学はその日常化に向け大きな一歩を踏み出したこととなります。あれから一世紀たらずの間に、すでに欧米の都市では開業し対話を治療技法とする多くの精神科医やカウンセラーが登場し、非日常的に位置づけられやすいものを町の日常性のただ中に置くことで、改めて正気と狂気との間の橋渡しの場を設定しています。この日本においても、大都市においては外来中心の精神科クリニックというものが存在するという事実は、すでに広く知られるようになってきましたが、この進出を促進するのが精神分析のことばです。日常性のなかの実践のために輸入される精神分析技法の中で、紹介が後れをとってきたのが、その「日常語の使用」の部分であったと言えましょう。たとえば、フロイト論文の英語訳について検討したB. ベッテルハイムの指摘に倣えば、精神分析の「自我」は「わたし」でありフロイトの言う「エス」（英語ではイド）は「それ」であるはずですが、当たり前のことですが、日本語にも心を描写するためのことばが豊富にありながら、臨床の研究者たちが日本語を生かすことを徹底するのは、やはり特別なことでした。ただその逆の現象はありました。たとえば「神経を病む」の「神経」ということばですが、これは杉田玄白ら解剖学者の造語である傑作のひとつで、あっと言う間にひろまって日常語と化しました。他にも、「神経衰弱」から最近の「アイデンティティ」「コンプレックス」まで、精神科医や心理学者が使うことばが次々と日常語になっています。つまり日本語のこの領域では、専門語が日常語になることが多いのです。

*企画者注

紙面の都合で北山先生に用意していただいた原稿の他の部分は割愛しますが、タイトルのみをあげると次のようなテーマが続きます。

甘え理論 / モデルメイキング / 診断 /
見立ての文学 / 描かれた過去 /
浮世絵の中の母子関係 / 浮かんで消える
昔話からも学ぶ

「浮世絵の中の母子関係」では、250組の母子を描いた浮世絵の中から典型例をスライドで例示し、「共に眺める」構図の意味を考えます。